

ある崖上の感情

梶井基次郎

ある蒸し暑い夏の宵のことであつた。山ノ手の町のとあるカフェで二人の青年が話をしていた。話の様子では彼らは別に友達というのではなさそうであつた。銀座などちがつて、狭い山ノ手のカフェでは、孤独な客が他所よそのテーブルを眺めたりしながら時を費すことはそう自由ではない。そんな不自由さが——そして狭さから来る親しさが、彼らを互いに近づけることが多い。彼らもどうやらそうした二人らしいのであつた。一人の青年はビールの酔いを肩先にあらわしながら、

コップの尻でよごれた卓子テーブルにかまわず肱ひじを立てて、先ほどからほとんど一人で喋しゃべっていた。漆喰しつくいの土間の隅すみには古ぼけたビクターの蓄音器が据えてあつて、磨り減ったダンスレコードが暑苦しく鳴っていた。

「元来僕はね、一度友達に凶星を指されたことがあるんだが、放浪、家をなさないという質たちに生まれついてゐるらしいんです。その友達というのは手相を見る男で、それも西洋流の手相を見る男で、僕の手相を見たとき、君の手にはソロモンの十字架がある。それは一生家を持たない手相だと言ったんです。僕は別に手相などを信じないんだが、そのときはそう言われたこと

でぎくつとしましたよ。とても悲しくてね——」

その青年の顔にはわずかの時間感傷の色が酔いの下にあらわれて見えた。彼はビールを一と飲みするとまた言葉をついで、

「その崖の上へ一人で立つて、開いている窓を一つ一つ見ていると、僕はいつでもそのことを憶い出おもすんです。僕一人が世間に住みつく根を失って浮草のように流れている。そしていつもそんな崖の上に立つて人の窓ばかりを眺めていなければならぬ。すっかりこれが僕の運命だ。そんなことが思えて来るのです。——しかし、それよりも僕はこんなことが言いたいです。

つまり窓の眺めというものには、元來人をそんな思いに駆るあるものがあるんじゃないか。誰でもふとそんな気持ちに誘われるんじゃないか、というのですが、どうです、あなたはそうしたことをお考えにはならないですか」

もう一人の青年は別に酔っているようでもなかった。彼は相手の今までの話を、そうおもしろがってもないが、そうかと言って全然興味がなくもないといった穏やかな表情で耳を傾けていた。彼は相手に自分の意見を促されてしばらく考えていたが、

「さあ……僕にはむしろ反対の気持ちになった経験しか

憶い出せない。しかしあなたの気持は僕にはわからないくはありません。反対の気持になった経験というのは、窓のなかにいる人間を見ていてその人達がなにかはない運命を持ってこの浮世に生きている。というふうに見えたということなんです」

「そうだ。それは大いにそうだ。いや、それがほんとうかもしれない。僕もそんなことを感じていたような気がする」

酔った方の男はひどく相手の言ったことに感心したような語調で残っていたビールを一息に飲んでしまった。

「そうだ。それであなたもなかなか窓の大家だ。いや、僕はね、実際窓というものが好きで堪たまらないんですよ。自分のいるところからいつも人の窓が見られたらどんなに楽しいだろうと、いつもそう思ってるんです。そして僕の方でも窓を開けておいて、誰かの眼にいつも僕自身を曝さららしているのがまたとても楽しいんです。こんなに酒を飲むにしても、どこか川つぶちのレストランみたいところで、橋の上からだとか向こう岸からだとか見ている人があって飲んでいるのならどんなに楽しいでしょう。『いかにあわれと思うらん』僕には片言のような詩しか口に出て来ないが、実際いつも

そんな気持になるんです」

「なるほど、なんだかそれは楽しそうですね。しかしなんとのどという閑かな趣味だろう」

「あつはつは。いや、僕はさつきその崖の上から僕の部屋の窓が見えると言ったでしょう。僕の窓は崖の近くにあつて、僕の部屋からはもう崖ばかりしか見えな
いんです。僕はよくそこから崖路を通る人を注意しているんですが、元来めつたに人の通らない路で、通る人があつたつて、全く僕みたいにそこでながい間町を見ているというような人は決してありません。実際僕みたいな男はよくよくの閑人なんだ」

「ちよつと君。そのレコード止してくれない」聴き手の方の青年はウエイトレスがまたかけはじめた「キャラバン」の方を向いてそう言った。「僕はあのジャツズというやつが大嫌いなんだ。厭いやだと思ひ出すととても堪らない」

黙つてウエイトレスは蓄音器をとめた。彼女は断髪をして薄い夏の洋装をしていた。しかしそれには少しもフレツシユなところがなかった。むしろ南京鼠なんきんねずみの匂いでもしそうな汚いエキゾテイシズムが感じられた。そしてそれはそのカフェがその近所に多く住んでいる下等な西洋人のよく出入りするといふ噂うわさを、少し陰

気に裏書きしていた。

「おい。百合ちゃん。百合ちゃん。生をもう二つ」

話し手の方の青年は馴染のウエイトレスをぶつきら
棒な客から救ってやるというような表情で、彼女の方
を振り返った。そしてすぐ、

「いや、ところがね、僕が窓を見る趣味にはあまり人
に言えない欲望があるんです。それはまあ一般に言え
ば人の秘密を盗み見るといふ魅力なんです、僕のは
もう一つ進んで人のベッドシーンが見たい、結局はそ
ういったことに帰着するんじゃないかと思われるよう
な特殊な執着があるらしいんです。いや、そんなもの

をほんとうに見たことなんぞはありませんがね」

「それはそうかもしれない。高架線を通る省線電車にはよくそういったマニヤの人が乗っているということですよ」

「そうですかね。そんな一つの病型タイプがあるんですかね。それは驚いた。……あなたは窓というものにそんな興味をお持ちになったことはありませんか。一度でも」

その青年の顔は相手の顔をじっと見詰めて返答を待っていた。

「僕がそんなマニヤのことを言う以上僕にも多かれ少なかれそんな知識があると思っていいでしょう」

その青年の顔にはわずかばかりの不快の影が通り過ぎたが、そう答えて彼はまた平気な顔になった。

「そうだ。いや、僕はね、崖の上からそんな興味で見る一つの窓があるんですよ。しかしほんとうに見たということは一度もないんです。でも実際よく瞞だまされる、あれには。あつはつはは……僕がいつたいどんな状態でそれに耽ふけっているか一度話してみましようか。僕はながい間じいつと眼を放さずにその窓を見ているのです。するとあんまり一生懸命になるもんだから足許もとが変に便りたよなくなつて来る。ふらふらつとして実際崖から落つこちそうな気持になる。はつは。それくらいに

なると僕はもう半分夢を見ているような気持です。すると変なことには、そんなとき僕の耳には崖路を歩いて来る人の足音がきまったようにして来るんです。でも僕はよし人がほんとうに通つてもそれはかまわないことにしている。しかしその足音は僕の背後へそうつと忍び寄つて来て、そこでびたりと止まってしまふんです。それが妄想もうそうというものでしょうね。僕にはその忍び寄つた人間が僕の秘密を知っているように思えてならない。そして今にも襟髪えりがみを掴つかむか、今にも崖から突き落とすか、そんな恐怖で息も止まりそうになつてゐるんです。しかし僕はやっぱり窓から眼を離さない。

そりやそんなときはもうどうなってもいいというような気持ですね。また一方ではそれがたいていは僕の気のせいだということは百も承知で、そんな度胸もきめるんです。しかしやっぱり百に一つもしやほんとうの人間ではないかという気がいつでもする。変なものですね。あっはっははは」

話し手の男は自分の話に昂奮こうふんを持ちながらも、今度は自嘲的なそして悪魔的といえるかも知れない挑いどんだ表情を眼に浮かべながら、相手の顔を見ていた。

「どうです。そんな話は。——僕は今はもう実際に人のベッドシーンを見るといふことよりも、そんな自分

の状態の方がずっと魅惑的になって来ているんです。何故と言つて、自分の見ている薄暗い窓のなが、自分の思っているようなものでは多分ないことが、僕にはもう薄うす^{うす}わかつています。それでいて心を集めてそこを見ているとありありそう思えて来る。そのときの心の状態がなんとも言えない恍惚^{こうこつ}なんです。いったいそんなことがあるものですかね。あつはつはは。どうです、今から一緒にそこへ行つてみる気はありませんか」

「それはどちらでもいいが、だんだん話が佳境には入^いって来ましたね」

そして聴き手の青年はまたビールを呼んだ。

「いや、佳境には入って来たというのはほんとうなんですよ。僕はだんだん佳境には入って来たんだ。何故^{なぜ}って、僕には最初窓がただなにかしらおもしろいものであつたに過ぎないんだ。それがだんだん人の秘密を見るという気持が意識されて来た。そうでしょう。すると次は秘密のなかでもベッドシーンの秘密に興味を持ち出した。ところが、見たと思つたそれがどうやらちがうものらしくなって来た。しかしそのときの恍惚^{こうこう}状態そのものが、結局すべてであるということがわかつて来た。そうでしょう。いや、君、実際その恍

惚状態がすべてなんですよ。あつはっはは。空の空なる恍惚万歳だ。この愉快な人生にプロジツトしよう」

その青年にはだいぶ酔いが発して来ていた。そのプロジツトに応じなかった相手のコツプへ荒々しく自分のコツプを打ちつけて、彼は新しいコツプを一気に飲み乾した。

彼らがそんな話をしていたとき、扉をあけて二人の西洋人がは入^いって来た。彼らのは入^いって来ると同時にウエイトレスの方へ色っぽい眼つきを送りながら青年達の横のテーブルへ坐った。彼らの眼は一度でも青年達の方を見るのでもなければ、お互いに見交わすとい

うのでもなく、絶えず笑顔を作つて女の方へ向いて
いた。

「ポーリンさんにシマノフさん、いらつしやい」

ウエイトレスの顔は彼らを迎える大仰な表情でにわ
かに生き生きし出した。そしてきやつきやつと笑いな
がら何か喋り合つていたが、彼女の使う言葉はある
自由さを持った西洋人の日本語で、それを彼女が喋る
とき青年達を給仕していたときとはまるでちがった変
な魅力が生じた。

「僕は一度こんな小説を読んだことがある」

聴き手であつた方の青年が、新しい客の持つて来た

空気から、話をまたもとへ戻した。

「それは、ある日本人が欧羅巴^{ヨーロッパ}へ旅行に出かけるんです。英国、仏蘭西^{フランス}、独逸^{ドイツ}とずいぶんながいごったごたした旅行を続けておしまいにウィーンへやって来る。そして着いた夜あるホテルへ泊まるんですが、夜中にふと眼をさましてそれからすぐ寝つけなくて、深夜の闇のなかに旅情を感じながら窓の外を眺めるんです。空は美しい星空で、その下にウィーンの市が眠っている。その男はしばらくその夜景に眺め耽っていたが、彼はふと闇のなかにたった一つ開け放された窓を見つめる。その部屋のなかには白い布のような塊^{かたまり}りが明

るい燈火に照らし出されて、なにか白い煙みたよ
うなものがそこから細くまつすぐに立ち騰のぼっている。
そしてそれがだんだんはつきりして来るんですが、思
いがけなくその男がそこに見出したものはベッドの上
にほしいままな裸体を投げ出している男女だったので
す。白いシーツのように見えていたのがそれで、静か
に立ち騰のぼっている煙は男がベッドで燻くゆらしている葉巻
の煙なんです。その男はそのときどんなことを思った
かというと、これはいかにも古都ウイーンだ、そして
いま自分は長い旅の末にやっとその古い都へやって来
たのだ——そういう気持がしみじみと湧いたというの

です」

「そして？」

「そして静かに窓をしめてまた自分のベッドへ帰って寝たというのですが——これはずいぶんまえに読んだ小説だけれど、変に忘れられないところがあつて僕の記憶にひっかかっている」

「いいなあ西洋人は。僕はウィーンへ行きたくなくなつた。あつはつは。それより今から僕と一緒に崖の方まで行かないですか。ええ」

酔つた青年はある熱心さで相手を誘つていた。しかし片方はただ笑うだけでその話には乗らなかつた。

生島（これは酔っていた方の青年）はその夜晩おそく自分の間借りしている崖下の家へ帰つて来た。彼は戸を開けると、それが習慣のなんとも言えない憂鬱を感じた。それは彼がその家の寝ている主婦を思い出すからであつた。生島はその四十を過ぎた寡婦かふである「小母おぼさん」となんの愛情もない身体からだの関係を続けていた。子もなく夫にも死に別れたその女にはどことなく諦あきららめた静けさがあつて、そんな関係が生じたあと

でも別に前と変わらない冷淡さもしくは親切さで彼を
遇していた。生島には自分の愛情のなさを彼女に偽る
必要など少しもなかった。彼が「小母さん」を呼んで
寢床を共にする。そのあとで彼女はすぐ自分の寢床へ
帰ってゆくのである。生島はその当初自分らのそんな
関係に淡々とした安易を感じていた。ところが間もな
く彼はだんだん堪^{たま}らない嫌悪を感じ出した。それは彼
が安易を見出していると同じ原因が彼に反逆するので
あった。彼が彼女の膚に触れているとき、そこにはな
んの感動もなく、いつもある白^{しろ}じらしい気持が消えな
かった。生理的な終結はあっても、空想の満足がな

かった。そのことはだんだん重苦しく彼の心にのしかか
かって来た。そのうちに彼は晴ればれとした往来へ出
ても、自分に羨しなびた古手拭のような匂しいが沁しみている
ような気がしてならなくなつた。顔貌にもなんだかい
やな線があらわれて来て、誰の目にも彼の陥っている
地獄が感あづかれそうな不安が絶えずつきまとつた。そ
して女の諦あきこめたような平気さが極端にいらいらした
嫌悪を刺戟するのだった。しかしその憤懣ふんまんが「小母さ
ん」のどこへ向けられるべきだろう。彼が今日にも出
てゆくと言つても彼女が一言の不平も唱えないことは
わかりきつたことであつた。それでは何故出てゆかな

いのか。生島はその年の春ある大学を出てまだ就職する口がなく、国へは奔走中と言つてその日その日をまったく無気力な倦怠で送っている人間であつた。彼はもう縦のものを横にするにも、魅入られたような意志のなさを感じていた。彼が何々をしようと思ふことは脳細胞の意志を刺戟しない部分を通つて抜けてゆくのであつた。結局彼はいつまで経つてもそこが動けないのである。――

主婦はもう寝ていた。生島はみしみし階段をきしらせながら自分の部屋へ帰つた。そして硝子窓ガラスをあけて、むつとするようにこもつた宵の空気を涼しい夜気と換

えた。彼はじつと坐つたまま崖の方を見ていた。崖の路は暗くてただ一つ電柱についている燈がそのありかを示しているに過ぎなかった。そこを眺めながら、彼は今夜カフェで話し合つた青年のことを思い出していた。自分が何度誘つてもそこへ行こうとは言わなかつたことや、それから自分が執しつこく紙と鉛筆で崖路の地図を書いて教えたことや、その男の頑かたくなに拒んでいゝる態度にもかかわらず、彼にも自分と同じような欲望があるにちがいないとなぜか固く信じたことや——そんなことを思い出しながら彼の眼は不知不識しらずしらず、もしやという期待で白い人影をその闇のなかに探しているの

であつた。

彼の心はまた、彼がその崖の上から見るあの窓のこ
とを考え耽ふけつた。彼がそのなかに見る半ば夢想のそし
て半ば現実の男女の姿態がいかに情熱的で性欲的であ
るか。またそれに見入っている彼自身がいかに情熱を
覚え性欲を覚えるか。窓のなかの二人はまるで彼の呼
吸を呼吸しているようであり、彼はまた二人の呼吸を
呼吸しているようである、そのときの恍惚こうこつとした心の
陶醉を思い出していた。

「それに比べて」と彼は考え続けた。

「俺おれが彼女に対しているときはどうであろう。俺はま

るで悪い暗示にかかつてしまったように白じらしらとなつてしまう。崖の上の陶酔のたとえ十分の一でも、何故彼女に対するとき帰つて来ないのか。俺は俺のそうしたものを窓のなかへ吸いとられているのではなからうか。そういう形式でしか性欲ふけに耽ることができなくなっているのではなからうか。それとも彼女という対象がそもそも自分には間違つた形式なのだらうか」

「しかし俺にはまだ一つの空想が残っている。そして残っているのはただ一つその空想があるばかりだ」

机の上の電燈のスタンドへはいつの間にかたくさん虫が集まって来ていた。それを見ると生島は鎖をひい

て電燈を消した。わずかそうしたことすら彼には習慣的な反対——崖からの瞰かんかけい下景に起こつたであろう一つの変化がちらと心を掠めるのであつた。部屋が暗くなると夜気がことさら涼しくなつた。崖路の闇もはつきりして来た。しかしそのなかには依然として何の人影も立つてはいなかつた。

彼にただ一つの残つている空想というのは、彼がその寡婦と寢床を共にしているとき、ふいに起こつて来る、部屋の窓を明け放してしまうという空想であつた。勿論彼はそのとき、誰かがその崖路に立っていて、彼らの窓を眺め、彼らの姿を認めて、どんなにか刺戟

を感じるであろうことを想い、その刺戟を通して、何の感動もない彼らの現実にもある陶酔が起こつて来るであろうことを予想しているのであつた。しかし彼にはただ窓を明け崖路へ彼らの姿を晒すさらということばかりでもすでに新鮮な魅力であつた。彼はそのときの、薄い刃物で背を撫でられるような戦慄を空想した。そればかりではない。それがいかに彼らの醜い現実に対する反逆であるかを想像するのであつた。

「いったい俺は今夜あの男をどうするつもりだつたんだらう」

生島は崖路の闇のなかに不知不識しらずしらず自分の眼の待つて

いたものがその青年の姿であったことに気がつくこと、ふと醒めた自分に立ち返った。

「俺ははじめあの男に対する好意に溢れていた。それで窓の話などを持ち出して話し合う気になったのだ。それなのに今自分にあの男を自分の欲望の傀儡かいらいにしようと思っていたような気がしてならないのは何故だろう。自分は自分の愛するものは他人も愛するにちがいないという好意に満ちた考えで話をしていたと思っていた。しかしその少し強制がましい調子のなかには、自分の持っている欲望を、言わば相手の身体にこすりつけて、自分と同じような人間を製造しようとしている

たようなところが不知不識にあつたらしい気がする。そして今自分の待つていたものは、そんな欲望に刺戟されて崖路へあがつて来るあの男であり、自分の空想していたことは自分達の醜い現実の窓を開けて崖上の路へ曝さらすことだったのだ。俺の秘密な心のなかだけの空想が俺自身には関係なく、ひとりでの意志で著ちやく々と計画を進めてゆくというような、いったいそんなことがあり得ることだろうか。それともこんな反省すらもちゃんと予定の仕組で、今もしあの男の影があすこへあらわれたら、さあいよいよと舌を出すつもりにしていたのではなからうか……」

生島はだんだんもつれて来る頭を振るようにして電燈を点し、寝床を延べにかかった。

3

石田（これは聴き手であつた方の青年）はある晩のことその崖路の方へ散歩の足を向けた。彼は平常歩いてきた往来から教えられたはじめての路へ足を踏み入れたとき、いったいこんなところが自分の家の近所にあつたのかと不思議な気がした。元来その辺はむやみに坂の多い、丘陵と谷とに富んだ地勢であつた。町の

高みには皇族や華族の邸に並んで、立派な門構えの家が、夜になると古風な瓦斯燈ガスの点く静かな道を挟はさんで立ち並んでいた。深い樹立のなかには教会の尖塔せんとうが聳そびえていたり、外国の公使館の旗がヴイラ風な屋根の上にひるがえっていたりするのが見えた。しかしその谷に当たったところには陰気なじめじめした家が、普通の通行人のための路ではないような隘路あいろをかくして、朽ちてゆくばかりの存在を続けているのだった。

石田はその路を通ってゆくとき、誰かに咎められはしないかというよううしろめたさを感じた。なぜなら、その路へは大っぴらに通りすがりの家が窓を開い

ているのだった。そのなかには肌脱ぎになった人がいたり、柱時計が鳴っていたり、味気ない生活が蚊遣りを燻したりしていた。そのうえ、軒燈にはきまつたようにやもりがとまっていて彼を気味悪がらせた。彼は何度も袋路に突きあたりながら、——そのたびになおさら自分の足音にうしろめたさを感じながら、やっと崖に沿った路へ出た。しばらくゆくと人家が絶えて路が暗くなり、わずかに一つの電燈が足もとを照らしている、それが教えられた場所であるらしいところへやって来た。

そこからはなるほど崖下の町が一と目に見渡せた。

いくつもの窓が見えた。そしてそれは彼の知っている町の、思いがけない瞰かんかけい下景であった。彼はかすかな旅情らしいものが、濃くあたりに漂っているあれちのぎく、の匂いに混じって、自分の心を染めているのを感じた。

ある窓では運動シャツを着た男がミシンを踏んでいた。屋根の上の闇のなかにたくさん洗濯物らしいものが灰白く浮かんでいるのを見ると、それは洗濯屋のほの家らしく思われるのだった。またある一つの窓ではレシーヴァを耳に当てて一心にラジオを聴いている人の姿が見えた。その一心な姿を見ていると、彼自身の耳

の中でもそのラジオの小さい音がきこえて来るように
さえ思われるのだった。

彼が先の夜、酔っていた青年に向かつて、窓のなか
に立ったり坐ったりしている人びとの姿が、みなな
かはかない運命を背負って浮世に生きているように見
えると言ったのは、彼が心に次のような情景を浮かべ
ていたからだった。

それは彼の田舎の家の前を通っている街道に一つ
見窄みすぼらしい商人宿があつて、その二階の手摺てすりの向こう
に、よく朝など出立の前の朝餉あさげを食べていたりする旅
人の姿が街道から見えるのだった。彼はなぜかそのな

かである一つの情景をはつきり心にとめていた。それは一人の五十がらみの男が、顔色の悪い四つぐらいの男の児と向かい合つて、その朝餉の膳に向かつているありさまだった。その顔には浮世の苦勞が陰鬱に刻まれている。彼はひと言も物を言わずに箸を動かしていた。そしてその顔色の悪い子供も黙つて、馴れない手つきで茶碗をかきこんでいたのである。彼はそれを見ながら、落魄らくはくした男の姿を感じた。その男の子供に対する愛を感じた。そしてその子供が幼い心にも、彼らの諦めなければならぬ運命のことを知っているような気がしてならなかった。部屋の中には新聞の付録

のようなものが襖ふすまの破れの上に貼つてあるのなどが見えた。

それは彼が休暇に田舎へ帰つていたある朝の記憶であつた。彼はそのとき自分が危く涙を落としそうになつたのを覚えていた。そして今も彼はその記憶を心の底に蘇よみがえらせながら、眼の下の町を眺めていた。

ことに彼にそういう気持を起こさせたのは、一棟ひとむねの長屋の窓であつた。ある窓のなかには古ぼけた蚊帳かやがかかつていた。その隣の窓では一人の男がぼんやり手摺てすりから身体を乗り出していた。そのまた隣の、一番よく見える窓のなかには、箆たんす笥などに並んで燈明の

灯った仏壇が壁ぎわに立っているのであつた。石田にはそれらの部屋を区切っている壁というものがはかなく悲しく見えた。もしそこに住んでいる人の誰かがこの崖上へ来てそれらの壁を眺めたら、どんなにか自分の安んじている家庭という観念を脆くはかなく思うだろうと、そんなことが思われた。

一方には闇のなかにきわだつて明るく照らされた一つの窓が開いていた。そのなかには一人の禿はげ顛あたまの老人が煙草盆を前にして客のような男と向かい合っているのが見えた。しばらくそこを見ていると、そこが階段の上り口になつてゐるらしい部屋の隅から、日本髪

に頭を結った女が飲みもののようなものを盆に載せながらあらわれて来た。するとその部屋と崖との間の空間がにわかに一揺れ揺れた。それは女の姿がその明るい電灯の光を突然遮さへぎつたためだった。女が坐つて盆をすすめると客のような男がぺこぺこ頭を下げているのが見えた。

石田はなにか芝居でも見ているような気でその窓を眺めていたが、彼の心には先の夜の青年の言つた言葉が不知不識しらずしらずの間に浮かんでいた。——だんだん人の秘密を盗み見するという気持が意識されて来る。それから秘密のなかでもベッドシーンの秘密が捜したくなつ

て来る。――

「あるいはそうかもしれない」と彼は思った。「しかし、今の自分の眼の前でそんな窓が開いていたら、自分はあの男のような欲情を感じるよりも、むしろものあわれと言った感情をそのなかに感じるのではなからうか」

そして彼は崖下に見えるとその男の言ったそれらしい窓をしばらく捜したが、どこにもそんな窓はないのであった。そして彼はまたしばらくすると路を崖下の町へ歩きはじめた。

「今晚も来ている」と生島は崖下の部屋から崖路の闇のなかに浮かんだ人影を眺めてそう思った。彼は幾晩もその人影を認めた。そのたびに彼はそれがカフェで話し合った青年によもやちがいがないだろうと思いついて、自分の心に企らんでいる空想に、そのたび戦慄を感じた。

「あれは俺の空想が立たせた人影だ。俺と同じ欲望で崖の上へ立つようになった俺の二重人格だ。俺がこうして俺の二重人格を俺の好んで立つ場所に眺めている

という空想はなんとという暗い魅惑だろう。俺の欲望はとうとう俺から分離した。あとはこの部屋に戦慄と恍惚こうごつがあるばかりだ」

ある晩のこと、石田はそれが幾晩目かの崖の上へ立って下の町を眺めていた。

彼の眺めていたのは一棟の産科婦人科の病院の窓であつた。それは病院と言つても決して立派な建物ではなく、昼になると「妊婦預ります」という看板が屋根の上へ張り出されている粗末な洋風家屋であつた。十ほどあるその窓のあるものは明るくあるものは暗く閉と

ざざされている。漏斗型じょうこうがたに電燈の被おほいが部屋のなかの明暗を区切っているような窓もあつた。

石田はそのなかに一つの窓が、寝台を取り囲んで数人の人が立っている情景を解放しているのに眼が惹ひかれた。こんな晩に手術でもしているのだろうかと思つた。しかしその人達はそれらしく動きまわる気配もなく依然として寝台のぐるりに凝立ぎょうりつしていた。

しばらく見ていた後、彼はまた眼を転じてほかの窓を眺めはじめた。洗濯屋の二階には今晚はミシンを踏んでいる男の姿が見えなかつた。やはりたくさんの洗濯物ほのが灰白く闇のなかに干されていた。たいていの窓

はいつもの晩とかわらずに開いていた。カフェで会った男の言っていたような窓は相不変見えなかつた。石田はやはり心のどこかでそんな窓を見たい欲望を感じていた。それはあらわなものではなかつたが、彼が幾晩も来るのにはいくらかそんな気持も混じっているのだつた。

彼が何気なくある崖下に近い窓のなかを眺めたとき、彼は一つの予感でぎくつとした。そしてそれがまごうかたなく自分の秘かに欲していた情景であることを知ったとき、彼の心臓はにわかには鼓動を増した。彼はじつと見ていられないような気持でたびたび眼を外ら

せた。そしてそんな彼の眼がふと先ほどの病院へ向いたとき、彼はまた異様なことに眼を瞠みはった。それは寢台のぐるりに立ちめぐっていた先ほどの人びとの姿が、ある瞬間一度に動いたことであつた。それはなにか驚愕きょうがくのような身振りに見えた。すると洋服を着た一人の男が人びとに頭を下げたのが見えた。石田はそこに起こつたことが一人の人間の死を意味していることを直感した。彼の心は一時に鋭い衝撃をうけた。そして彼の眼が再び崖下の窓へ歸つたとき、そこにあるものはやはり元のままの姿であつたが、彼の心は再び元のようにではなかつた。

それは人間のそうしたよろこびや悲しみを絶したあの
厳粛な感情であった。彼が感じるだろうと思つてい
た「もののあわれ」というような気持を超した、ある
意力のある無常感であつた。彼は古代の希臘ギリシヤの風習を
心のなかに思い出していた。死者を納いれる石棺せつかんのおも
てへ、淫みだらな戯れをしている人の姿や、牝羊めひつじと交合し
ている牧羊神を彫りつけたりした希臘人ギリシヤの風習を。――
――そして思つた。

「彼らは知らない。病院の窓の人びとは、崖下の窓を。
崖下の窓の人びとは、病院の窓を。そして崖の上にこ
んな感情のあることを――」

底本…「檸檬・ある心の風景」 旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

入力：j.utiya

校正…多村栄輝

1998年11月17日公開

2005年10月2日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。